

「オリーブ山で祈る」

2015年12月22日

ルカによる福音書 22章 39節～46節。イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」〔すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

主イエスと弟子たちはいつも集まるオリーブ山に来た。ここは、彼らの秘密の野営地で、オリーブ山の持ち主に使うことを許されていた場所であった。主イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。そしてご自分は、石を投げて届くほどの所に行かれ、祈り始めた。〔 〕に括られている部分は、後代の加筆とされているが、主イエスは苦しみ悶え、汗が血の滴るように地面に落ちるほど、深く真剣な祈りを捧げられた。

マタイとマルコ福音書は祈られた場所がゲツセマネであったと記している。「ゲツセマネの祈り」と言われている。「ゲツセマネの祈り」の場面は多くの画家たちによって描かれ、ハインリッヒ・ホフマンの絵は多くの人々に知られている。私はドレスデンのフラウエン(聖母)教会の聖壇に置かれた大きな「ゲツセマネの祈り」の彫刻が印象深い。

主イエスはひざまずいて祈られた。まず、神に「父よ」と親しく呼びかけ、二つのことを祈っている。一つは「御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」で、もう一つは「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」である。「御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」という祈りは、十字架で殺される苦難の杯を取りのけてくださいという祈りである。ユダヤでは十字架刑がしばしば執行された。十字架刑は最も残酷な刑罰で、苦しみ悶えて、窒息死する。主イエスも当然見ておられる。主イエスはこの苦しみから逃れさせてくださいと祈られた。人間イエスの恐怖に怯える祈りである。それは、魂を注ぎ出す祈りであった。ところが、後半の祈りは「わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」と、神のご意志に従いますという祈りに変わっている。最初は恐怖に深く怯えて、祈った。祈り続けていくうちに、二番目の祈りに到達したのである。二つの祈りの間には、大きな距離があったらう。

「ゲツセマネの祈り」は祈りの本質を示している。私たちは「こうしてください」と思うことを率直に祈っている。その願望を祈り求めていくと、願望は消え、神さまの御心にお委ねしますという祈りに昇華される。神さまにお委ねしますという祈りには、なかなか到達できないが、主イエスは「御心のままに行ってください」という祈りまで行き着いている。祈りは神に明け渡すまで祈ることで、そこに、真の解放と安らぎがある。

祈り終え、弟子たちの所に戻ってみると、彼らは眠りこけていた。主イエスは「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい」と再度言われ、叱責された。主イエスの苦悩を知らず、眠り込む弟子たちの姿は私たちの日常そのものを映し出しているようで、ただ恥じ入るばかりである。